

# ナイスケアだより

第120号  
令和4年5月発行

『ヤングケアラー』という言葉が最近耳にすることがありませんか。一般的に、『本来大人が担うと想定される家事や家族の世話などを日常的に行っている子ども』とされています。介護現場では以前から問題とされてきましたが『ヤングケアラー』という言葉が一般的に注目されるようになったのは近年だと思います。

介護保険開始当初に認知症の祖母の介護を中学生の孫が行っているケースがありました。日々途切れなく続く介護や家事だけではなく、小学生姉妹の世話もしていました。学校を休むことが度々あり、高校受験も諦めその生活を続けました。最終的にご利用様が施設入所し介護は終わりましたが、学業だけでなく子どもとして過ごす時間を犠牲にしてしまった印象です。本人や介護関係者だけではなく学校関係者などとも話し合いを重ねましたが、高齢者のみの支援と違い子どもの気持ちの理解や支援が難しかったと記憶しています。

現在でも同様に近いケースはあります。まずは子ども達が抱え込むのではなく気軽に相談できる相手や窓口を作ることが大事です。それと同時に埋もれているケースも多いので、近隣のゆるやかな見守り体制から専門機関に繋ぐ連携も必要です。すぐに解決とはなりません、行政・専門職・地域で協力しサポート体制を構築させ、必要な支援やサービスが柔軟に受けられるようになることが地域共生社会の一步だと考えます。



有限会社ナイスケア 代表取締役 塩川 隆史

## ～技術発展と介護～

昨今、技術の発展には目を見張るものがあります。教育や働く現場など様々な分野で変化しています。

介護や医療の現場でも変化があります。介護職や医療職だけでなく、ご利用者様やご家族からも情報を確認できるようにSNS(インターネットを活用したコミュニケーションツール)が導入されています。お互いに忙しく、中々連絡が取れない時がどうしてもありますが、好きなタイミングで情報を確認できるので重宝しています。

先日、ご自宅でサービス担当者会議が開かれた時、介護や医療のスタッフがパソコンを一人一台持って参加しました。ふと周りを見渡してみると驚いたことにスタッフだけでなく、ご利用者様やその伴侶も違和感なくその状況を受け入れて医師やケアマネジャーと会話していました。社会全体が新しい技術に順応してきていると感じました。

しかし変わらない事もあります。『介護』です。近年、骨が細く歯が擦り切れた縄文時代の人骨がみつかりました。これは介護を受けていた可能性があるとの事です。昔から助け合いの心があったのは心が和みますね。技術が発展しても助け合いの心を忘れないようにしたいです。

高岡 創